

山水ありて草木の枝葉をさかえしめ、草木ありて山水の風景をよそほふ。是をのづからなる文質とやいふべからむ。いにしへより山水をこのむの人おほかれど、さるところどころ見めぐりつくすことを得ず。ここに秋里籬寫といへるもの、花洛林泉の名だたるをことごとく画にうつさしめ、その故実由縁をもくはしく書あらはせり。されば都の人すら名のみ聞及ぶにも見ずしらぬところのこころあなれば、貴賤老幼も車馬のいたはりなく、居ながら幽邃の風景をめでのしませむの心をおこしてあづさにちりばむるこそ、まことにおほかたならぬ雅趣なりけれ。簡文帝の華林園にて心に会するところは、何ぞかならずしも遠きにあらむや。翳龍たる林水をのづから濠濮間の想ありとのたまひしに、おなじおもむきなるべし。彼函会つるに五冊の双帙となして同好の人にひろめ、あるははるかるるさかひにおもむくつともなりなんと、おもひよりしこころざしのみまめやかなるを感じてつたなき言葉をかいつけ侍る。

寛政とをあまりひととせの春

藤波二位季忠卿・水竹居主人書